

第1回公共交通の利便性向上検討会議議事概要

－開催概要－

日 時：令和2年6月16日（火）10：00～11：45

場 所：埼玉県庁本庁舎2階 庁議室

出席者：委員（敬称略） 久保田尚、金山洋一、吉田樹、堀光敦史、石井貴司

配布資料：資料1 公共交通の利便性向上検討会議の概要

資料2 県内公共交通に係る状況等について

資料3 今後の進め方について

公共交通の利便性向上検討会議設置要綱

－議事概要－

1 知事挨拶

- ・「あと数マイルプロジェクト」は、公共交通網及び道路網の更なる利便性向上や交通困難地域のアクセス向上を目指す取組である。
- ・社会経済環境が大きく変化する中だからこそ、埼玉県として未来を見据えた取組をしっかりと進めていきたい。
- ・委員の皆様には、将来の人口減少や高齢化、新技術等の動向などに加え、本県の公共交通を巡るこれまでの経緯なども踏まえ、課題の整理や埼玉県が目指すべき方向性について十分にご検討いただきたい。

2 委員長選出等

（1）委員長の選出

- ・各委員の同意を得て久保田委員を委員長として選出した。

（2）会議の扱い

- ・忌憚のない意見交換を行うため、また、発言によっては特定の関係者の利害に影響がある内容を含むことも考えられることから、議事は非公開の扱いとすることを決定した。

3 議事

（1）公共交通の利便性向上について

- ・P11の輸送量については、鉄道のシステムごとに輸送力の差がある。輸送量が少なくても混雑している路線もあることから、単純に輸送量が少ないから増やすという議論にはならない。
- ・P12のバス利用者が増加した理由としては、平成18年に道路運送法のバスの扱いの変更でコミバスが追加されたこと、バス会社で乗り放題のパスを導入

したこと、ICカード導入で利用者が把握できたことがある。

- ・P22の公共交通カバー率については、運行本数が少なくてもネットワークとしてカバーされていることになるが、同時にどの程度のサービスレベルなのかも考える必要がある。
- ・P24の県民アンケート結果の不満の解決策の一つは、バスの運行情報のアプリであり、バスロケーションシステムと合わせるとバス停で待つ不満は低くなる。アプリがあると便利だが、運行頻度が異なっていると乗換えに時間がかかるので、運行頻度や接続も大事である。
- ・P26の交通事業者アンケート結果で乗務員不足とされているが、業界としての魅力を高めていくことも必要。
- ・富山ライトレールの例だが、運行頻度を1時間に1～2本から4～6本に増やすことにより利用者が増えている。サービスレベルを変えることで客が増えている。
- ・コロナの影響については、今は薬がない状況だが、薬ができたとしても通信系のインフラの普及が進んだので、コロナ前の状況には戻らないのではないかと。経済的な面では投資が抑制され、経済の影響も出ると思われる。通勤定期券の利用者についても、自宅か職場かの選択による影響も考えられる。

(2) 今後の進め方について

- ・延伸というと延伸先だけの議論となりがちだが、延伸元も考えないといけない。
- ・新技術はまず実証を行い、その技術をどう鍛えていくのかということである。自動運転はまだまだ限定空間での利用に限られる。
- ・自動運転は解釈が分かれる。都市に与える影響、東京圏の郊外部なら鉄道にも寄与するという意見もある。反面、高齢者などの沿線への居住立地が進みにくくなり、コンパクトシティに逆行するという意見もある。
- ・都市にとってプラスかどうかといった観点も踏まえて議論ができればいいと思う。
- ・コロナの影響についても将来の需要をどう見込むのか、いくつかのシナリオが必要ではないか。
- ・公共交通の確保の方法は何十年も変わっていないのは気になる。イノベーションはそんなに起きていない。地域公共交通活性化再生法の改正で利便増進事業が認められれば新しいことができるようになる。

以上